

「看護実践能力評価基準検討委員会」

1. 構成員

1) 委員

委員長：荒木暁子（東邦大学）

副委員長：西村礼子（東京医療保健大学 五反田）

委員：佐藤聖一（国際医療福祉大学）、福田友秀（武蔵野大学）、野島敬祐（京都橘大学）

2) 協力者

なし

2. 趣旨

本委員会は、看護実践能力評価における評価項目の作成および評価方法の検討を行うことを目的とする。

活動 1) 看護実践能力評価のための評価項目・基準・到達度作成のための調査研究

活動 2) CBT 実証事業の実施、運用評価

活動 3) CBT/OSCE 等による臨床能力測定のための情報収集

3. 活動経過と今後の課題

委員会開催：29 回 委託業者との打合せ：39 回

上記会議開催のほかに、コミュニケーションツール（Slack）を用いて非同期にて調整多数。

活動 1) 看護実践能力評価のための評価項目・基準・到達度作成のための調査研究

活動 1 については、文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂に関する連絡調整委員会」（令和 5 年度～）のサイトを参照。

「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂に関する連絡調整委員会」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/125/

活動 2) CBT 実証事業の実施、運用評価

看護実践能力評価基準検討委員会内 JANPU-CBT 実証事業として、4 回の会議を実施した。

2023 年度 JANPU-CBT 実証事業では、より多くの会員校に CBT 実施に向けた運営上の環境整備や組織体制構築（人・物・金・技術・時間・情報・運用課題の検討）など CBT の実施・運営について評価を得ていただき、看護学教育における CBT 導入推進および、看護学教育における参加型臨地実習の実現に向けた CBT 導入および MEXCBT システム上の課題抽出および文部科学省への要望の示唆を得ることを目的とし、実証校の公募を会員校の 3 割程度（45-90 校）に増やした。

実証は 2 回とし、日程は 1 回目を 9 月 26 日（火）、2 回目を 3 月 19 日（火）と決定し、実証校公募期間を 6 月 12 日（月）～7 月 10 日（月）までとして募集した。9 月 11 日（月）～12 月 11 日（月）の期間で 3 月実証校の追加募集を行い、最終的に 13 校の実証参加となった。JANPU-CBT 実施のための CBT システムとして 2022 年度に引き続き文部科学省 CBT システム（MEXCBT:メクビット）を使用した。MEXCBT の使用および、実証事業により浮かび上がった課題の報告のため、文部科学省総合教育政策局教育 DX 推進室と、5 月 26 日（金）と 6 月 26 日（月）、9 月 13 日（水）の 3 回打ち合わせを行った。

本年度 JANPU-CBT 実証事業は計画通り 2 回の実証を実施した。3 月 19 日の実証事業では公共交通機関のトラブルのため、本部の対応として該当エリアの実証校に試験開始時間の繰り下げなどの対応をし、問題なく進行した。

ここで、JANPU-CBT 実証事業の終了後報告および学生アンケートから以下概要を示す。

(1) JANPU-CBT 終了後の実証校責任者報告概要

- ・実証参加学年は 2 学年 9 校、3 学年 4 校であった。
- ・使用機材は、大学に設置されているデスクトップ PC、大学のノート PC、個人のノート PC、個人のタブレットであった。
- ・実証校責任者以外で JANPU-CBT に動員された人数としては、監督者が 2～14 名、事務職員が 1～4 名、それ以外の人員は 0～4 名であった。
- ・使用した教室は 1～4 部屋、分散受験や遅刻者・トラブル対応の為に使用した。
- ・JANPU-CBT のために特別に使用した費用はなかった。

(2) 学生アンケート

- ・CBT の実施は臨地実習に出る前に必要かという質問に、とてもそう思う、そう思うと回答した学生は、77.0%であった。
- ・CBT の実施時期は自身の臨地実習前の知識を測定するのに適切な時期でしたかという質問に、とてもそう思う、そう思うと回答した学生は、69.7%であった。
- ・採点結果は自身の知識量を反映していると思うかという質問に、とてもそう思う、そう思うと回答した学生は、90.1%であった。
- ・採点結果は実習前に補完すべき知識が何であるか理解を促すものであったかという質問に、とてもそう思う、そう思うと回答した学生は、76.5%であった。
- ・採点結果による臨地実習に対する気持ちの変化についての質問に、否定的を 1、肯定的を 10 とした場合、6 以上にチェックをつけ肯定的な変化があったと回答した学生は 65.4%であった。

学生としても CBT の必要性について理解され、実施時期、採点結果からうける学習理解度や補完すべき知識の確認、臨地実習に対する気持ちの変化についても概ね良い評価を得られたと考える。

2024 年度の JANPU-CBT 実証事業の継続と参加希望校の把握を目的とし、1 月 9 日（火）～1 月 29 日（月）の期間で意向調査を実施した（調査結果一覧 3 参照）。

本年度の実証事業を通して浮かび上がった今後の課題は下記の 3 点である。

①情報発信

会員校が参加しやすい CBT 実施・運営方法の構築や、サポート体制の整備・拡充

②実証参加校の拡大

JANPU-CBT 実証事業の目的、実施に必要な準備、当日の動きなど、具体的な情報の提供、実施要項など公開情報の周知

③JANPU-CBT への期待とその対応

次年度 JANPU-CBT に参加を検討している会員校や、今後検討する会員校、検討するための情報を求めている会員校がある。

JANPU-CBT に対する期待があり今後も事業継続の必要性がある。具体的には、CBT に関する共通認識を持つための啓蒙活動、各会員校における CBT 実証事業の目的の理解・協力体制・環境整備等を早期に構築する必要がある。

CBT 評価基準に基づいた問題作成、問題の質保証、問題プール方法の検討

活動 3) CBT/OSCE 等による臨床能力測定のための情報収集

文部科学省『令和 5 年度「先導的大学改革推進委託事業」看護学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けた調査研究』に付随して、今後は中長期的に看護基礎教育における臨床実践能力評価尺度の開発とその検証を計画しており、既に CBT・OSCE 等臨床能力測定を実施している医療教育関連の組織や団体、看護学の有識者にヒアリングを行い、導入に必要な準備や直面する課題を整理し、今後の方向性を検討することとした。

活動目的の達成のために、3 名の有識者と 4 団体にヒアリングを実施した。ヒアリングにあたり、文献レビューや公表された文書における情報を精査し、各団体・有識者に応じたヒアリング項目を設定した。

今回のヒアリング結果から 4 つの観点の結果と示唆が得られた。

①実践能力・評価基準に基づく実践能力測定のための指標や問題作成や評価システムの検討、CBT/OSCE の持続的かつ実現可能な実装

- 看護師の実践能力、および、実践能力を評価できる基準
- 能力と評価基準に対応した看護を評価する指標やツールの検討
- 評価指標の妥当性と信頼性、評価ツールの効率性・持続性と一貫性
- 継続評価、持続的なブラッシュアップ、総合的評価
- 将来的・中長期的な CBT/OSCE/臨床能力問題による測定の差別化、
- 一貫性ある・連動した問題作成や評価基準やブループリント

上記は、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの学修目標と連動して進める必要がある。また、「看護実践能力と評価基準に基づく測定指標、ツール、分析、問題の質と妥当性、評価の検討・開発」には各専門分野の看護実践能力や看護学教育の知見の他に、情報システムとデータサイエンス、全体デザイン、粒度（知識の範囲や深さ）を揃えるジェネラリストが持続的に必要である。さらに、実践能力の測定、学修成果のデータ蓄積と検証は専門業者への開発・保守・管理の一部委託も合わせて検討、IRT、CAT (Computerized Adaptive Test) や AI を活用した効果的・持続的な評価システム検討が必要である。

②医学教育における CBT/OSCE などを活用したシームレスな客観的評価

複数の客観的評価試験（入学試験、CBT/OSCE、Post Clinical Clerkship OSCE、医師国家試験、臨床研修医対象基本的臨床能力評価試験）による評価の仕組みは医学教育の分野別保証、医学教育の質保証につながる。

臨床実習検討委員会最終報告について（H3）、診療参加型臨床実習のための医学生の医行為水準策定（H27）、医学部の臨床実習において実施可能な医行為の研究報告書（H30）、医学生が臨床実習で行う医業の範囲に関する検討会報告書などを経て、医療の質保証の検討、医師法の一部改正に至った。

基礎教育・継続教育・臨床研修・生涯学習との一貫性について関係機関等と協議を行い、卒前から卒後までのシームレスな教育体制と保証制度、評価のためのシステム構築には、多くの関連団体（関係省庁・制度保証・検討会・ガイドライン・患者会・実習環境・教育組織環境・学生）の理解と協力、啓蒙活動が必要である。

③CBT/OSCE/臨床能力測定問題の導入における運用の課題

CBT/OSCE 実施は、実施環境、デバイスの規格、セキュリティ、評価者能力などの課題があり、どのデバイスや環境でも作動・実施可能なシステム構築と環境整備と準備が必要である。特に音声・動画を活用した CBT/OSCE は各教育機関の理解と環境が必要なため、実証事業に参加、共通認識を持つための啓蒙活動（FD など）実施など、協力体制を早期に構築する必要がある。

④看護基礎・継続教育の一貫したシームレスな看護職育成の推進、教育と看護の質保証（CBT・OSCE・臨地実習の連携）

看護基礎教育と継続教育の連携を強化するためには、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの

到達目標を基礎教育と継続教育のつながりを示すこと、特定行為研修の共通科目との重複を避けること、専門基礎分野と専門分野が統合されたカリキュラムを提案することが求められる。従来の教育体系における専門基礎分野の知識が臨床で活用されていない問題や、目的・目標・評価の不明瞭さは改善が急がれる。また、専門職連携教育では、看護学生の医療専門職としての共通言語の獲得・活用に向けた教育プログラムの充実が求められる。基礎教育と継続教育をつなぐ明確な到達・評価の構造化と、多年次積み上げ型などのコンピテンシー基盤型カリキュラムの在り方を検討する必要がある。

CBT/OSCE の効果を最大化するためには、看護学教育モデル・コア・カリキュラムと連動した形での位置づけが非常に重要であり、臨地実習との関連や今後の看護職の活動範囲・内容を示した上で、手段としての位置づけを検討することが求められる。現時点で、看護基礎教育と特定行為研修における基礎科目の学修内容の多くは重複していることから、学びのアウトプットの方法を検討・改善し、臨地実習でも活用可能な形を提案できれば、教育プログラムを通した多職種チームにおける看護専門職としての位置づけを明確にすることが可能となる。

看護基礎教育と継続教育の間での連携強化、臨床実践能力の明確な評価基準と段階の設定、多職種連携・プロフェッショナリズムを通じた専門性の明示、医療職全体と看護職のコンピテンシーの明確化、多職種チームの中での共通言語を持つことが必要である。

以上、今回のヒアリング結果から 2040 年以降の社会を想定した次世代を担う看護師の看護実践能力に基づくコンピテンシー基盤型教育、および、コンピテンシー基盤型カリキュラムを実現するための各組織への支援、それを評価するシステム等の検討が必要であるという示唆を得た。そのためにも、JANPU においては、卒業時点・各専門領域の臨地実習時点・各専門領域の臨地実習前時点における看護実践能力評価基準を明示するとともに、評価基準に基づく能力測定のための評価課題と、その信頼性・妥当性の検証、測定の仕組みや評価など、教育と評価のシステム構築により看護学教育の質保証を目指すための活動が必要である。

4. 資料

- ・ 2024 年度 JANPU-CBT 意向調査結果（調査結果一覧 3 参照）
- ・ 2023 年度 JANPU-CBT 実証事業報告書（JANPU ホームページ会員校専用ページに掲載）